

オホーツク文化の銚頭の分類についての覚書

高橋 健*

はじめに

紀元後5～9世紀頃に北海道オホーツク海沿岸を中心に広がったオホーツク文化は、海獣狩猟を積極的に行っていたことで知られる。オホーツク文化の遺跡からは、オットセイやアザラシなどの海獣の骨や、銚頭や釣針などの狩猟漁撈具が大量に出土する。

オホーツク文化の銚頭の分類としては、前田(1974)による分類が用いられることが多い。筆者も、2002年の東京大学総合研究博物館での展示『北の異界:古代オホーツク氷民文化』の図録において、この前田1974年分類を整理した分類図(参考図1)を示し、分類基準について解説したことがある(高橋2002)。その後も、発掘調査報告書の実績記載⁽¹⁾や個別のテーマに関する論考、骨角器についての概説などでオホーツク文化の銚頭を取り上げてきたが、サハリンの資料の分類についての検討(高橋他2005)を行った以外は、銚頭の分類そのものを論じる機会はなかった。これは、少なくとも北海道のオホーツク文化に関する限りは、今日でも前田1974年分類の枠組みに大きな変更の必要性はないと考えているためである。しかし、2002年の解説からすでに20年近くが経過しており、基本的な考え方に変更はないものの、用語等に一部修正を加えた部分

がある。本稿では北海道オホーツク文化の銚頭の分類について、改めて筆者の考えを整理してみたい。また、筆者が銚頭の分類を示すのに多用してきたマス目状の分類図についても検討する。

分類基準

銚とは、水域で狩猟漁撈に使用される刺突具のうち、獲物に刺さった後に先端部が柄から外れ、先端

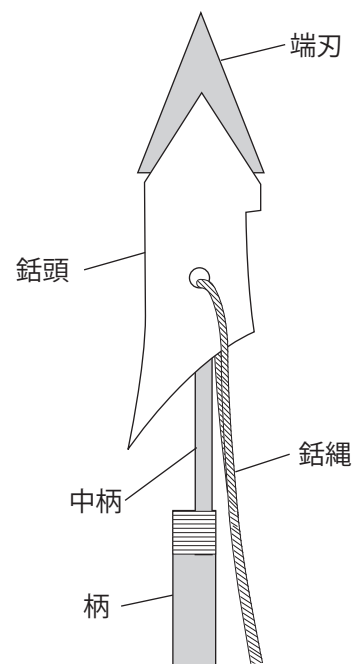


図1 銚を構成する部品

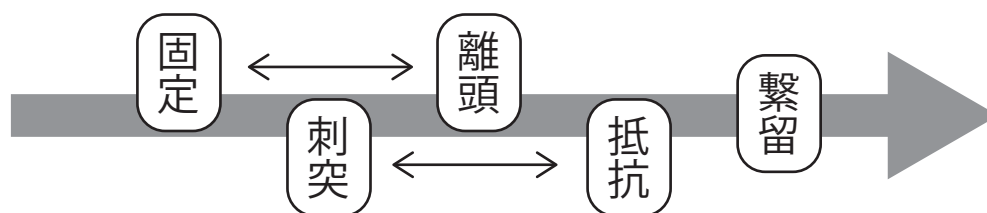


図2 銚頭の機能

*TAKAHASHI Ken 横浜ユーラシア文化館主任学芸員

部に結びつけられた縄によって獲物を確保する仕組みのものを指す。鉞は、鉞頭（鉞先）、中柄、柄、鉞縄（繫索）などの部品で構成される（図1）。

鉞頭には、固定・刺突・離頭・抵抗・繫留の5つの機能が備わっている（図2、図4d）。すなわち、柄²⁾に固定され（固定）、獲物に突き刺さり（刺突）、先端が柄から外れ（離頭）、獲物の体内に引っかかり（抵抗）、鉞縄によって獲物をつなぎとめる（繫留）。鉞頭の中心的な機能は、その定義からも明らかなように、離頭機能である。繫留機能も、刺突具の中では鉞頭にほぼ特有の機能とみてよい（ただし、柄に固定するための加工と区別が難しい場合がある）。抵抗機能はヤスの一部にも備わっており、固定機能と刺突機能は柄に装着する刺突具全般に共通する。また、これらの機能の中には、固定と離頭、刺突と抵抗のように、相反する性質のものがある。鉞頭の形態・構造は、こうした複数の、時に相反する機能を満たすために工夫されている。

鉞頭の種類は、いくつかの異なる着眼点によって行われてきた。上にみた諸機能との関係に注目しながら、これらの分類基準を概観してみたい。研究史や過去の用例との比較については、すでに詳しく述べたことがあるため（高橋2001・2008）、本稿では繰り返さない³⁾。鉞頭の部分名称については図3に示しておいた。

まず、固定機能と離頭機能については、獲物に刺さるまでは鉞頭をしっかりと柄に固定し、刺さった後はすみやかに柄から外れる必要がある。このために、柄への装着方法としては、凸部と凹部を組み合わせる構造が採用されることが多い。鉞頭本体に設けた凹部（ソケット）に柄（中柄）先端の凸部を差し込むタイプを雌形と呼び、鉞頭基部の凸部を柄先端の凹部に差し込むタイプを雄形と呼ぶ（図4a）。

このうち雌形は、ソケットの形状によって細分されている（図4b）。ソケットの断面形が閉じている（穴になっている）ものを閉窩式、開いているものを開窩式と呼ぶ⁴⁾。開窩式には、ソケットの両側壁が内傾・内湾して断面がフラスコ状になり、縄などで補強することなしに鉞頭を保持できる例もあるが、北海道のオホーツク文化では確認できない。北海道オホーツク文化にみられる開窩式⁵⁾は、溝状のソケットの周りに縄を巻き付け、できた隙間に柄（中柄）を差し込む仕組みである（図4b下）。

開窩式鉞頭は、固定機能と繫留機能との関係によって、さらに兼用式と分離式に分けることができる⁶⁾（図4c）。鉞頭には、溝や孔などの縄を結びつけるための加工（装置）がみられる。鉞頭を柄に保持する固定機能と、鉞頭をつなぎとめる繫留機能を、一つの装置、すなわち溝で兼ねているのが兼用式である。これに対して分離式は、両者の機能が二つの

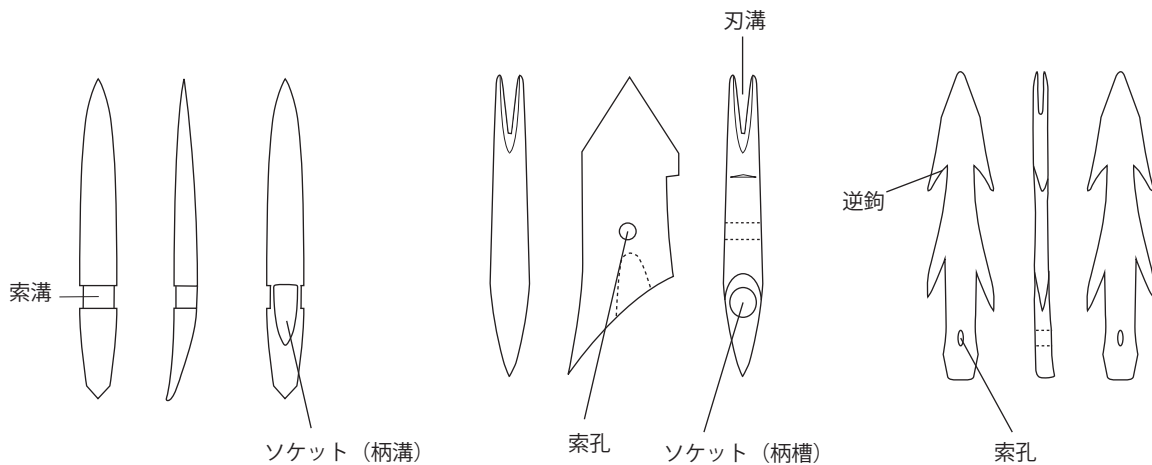
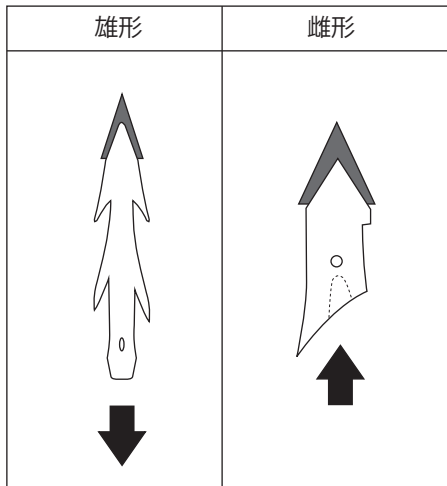
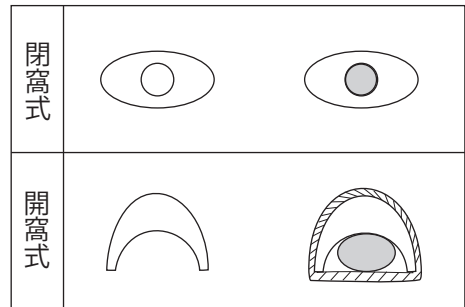


図3 鉞頭の部分名称

a. 雄形／雌形

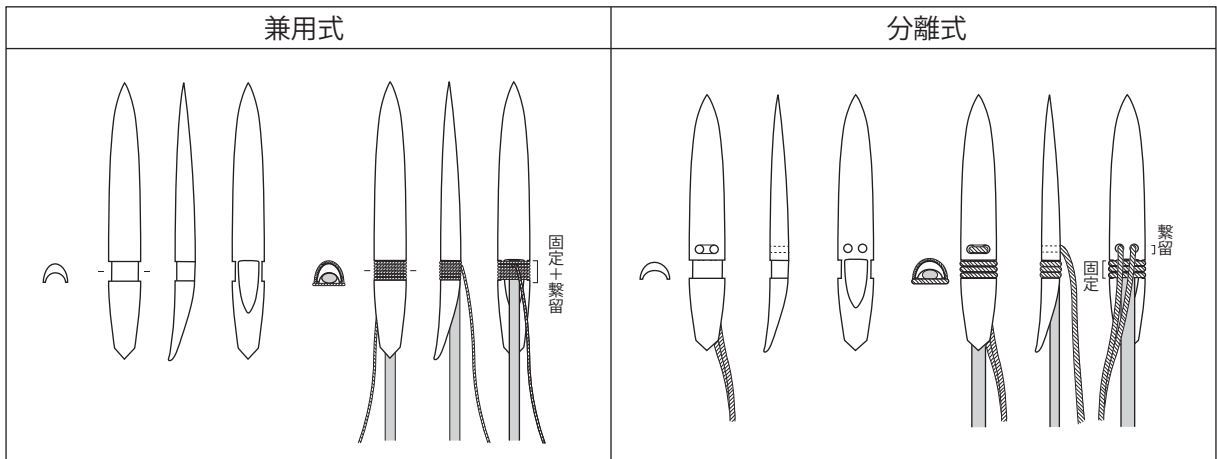


b. 開窩式／閉窩式



(ソケットの断面図)

c. 兼用式／分離式



d. 鉤引式／回転式

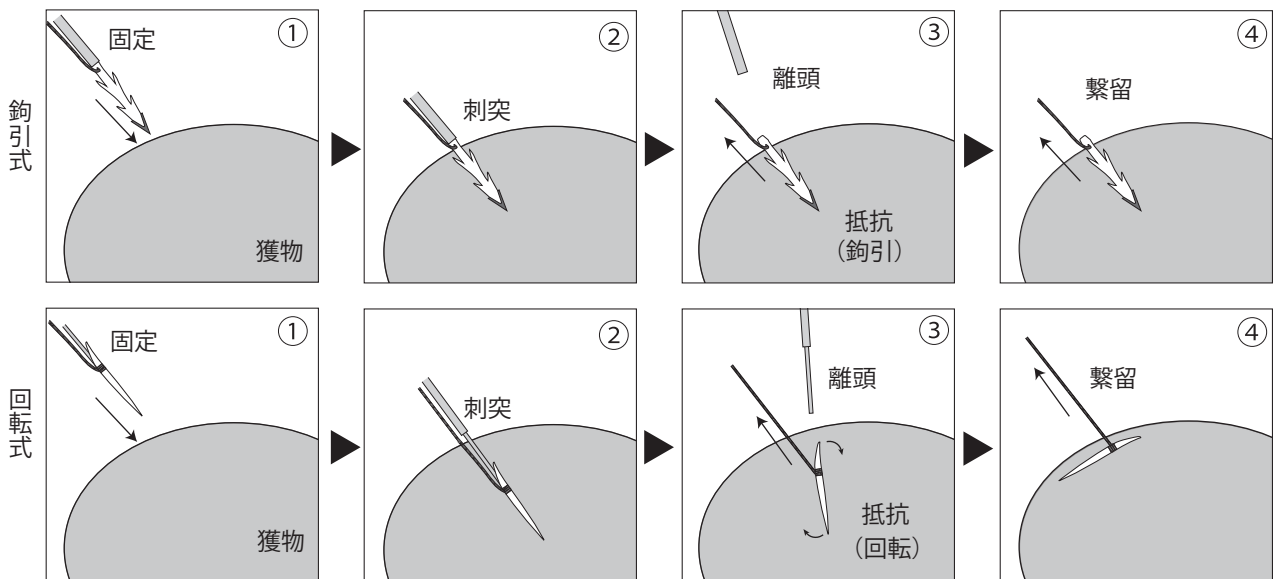


図 4 銚頭の種類基準

装置、すなわち溝と孔に分離している⁽⁷⁾。

以上みた分類基準は、全て柄への装着方法についてであり、固定機能・離頭機能に関わるものであった。このほかに銚頭の分類にあたっては、獲物の体内にどのように引っかかるか、という銚頭の抵抗機能に関わる分類基準がしばしば用いられる(図4d)。ギザギザの逆鉤(かえし、かえり、逆刺)によって引っかけるという方法が、鉤引式である⁽⁸⁾。これに対して、獲物の体内で銚頭が方向を変えて留め金のように引っかかるという方法が、回転式である。この回転式・鉤引式の分類は銚頭研究において多用されてきたもので、当然それだけの有効性があると考えられる。しかし、回転式であるのかどうかの判断が難しい資料が存在し、それをどう扱うかについて、研究者間で意見が分かれてきた。前田(2002)によって新たに提唱された逆鉤の数と索孔の位置による「複合式」も、抵抗機能による分類である。

さらに、回転式を抵抗面(90度回転したと想定した場合に抵抗を受ける面)の幅が広いタイプと狭いタイプに細分することがある。これも抵抗機能に注目した分類である。エスキモーの銚頭で使われるFlat typeとThin typeや、後述するオホーツク文化のC群/D群の分類がこれに相当する。

銚頭をどうやってつなぎとめるかという繫留機能については、銚縄の装着方法によっていくつかの分類が可能である。まず、銚頭に溝(索溝)を設けてそこに結び付ける方法がある。この溝が固定機能を兼ねているものが、前述した兼用式になるわけである。孔(索孔)に縄を通す方法は、孔の数と方向で細分可能である。抵抗面に対して平行な方向(横方向)に一つの孔をもつ場合と、抵抗面と直交する方向(縦方向)に二つの孔をもつ場合である⁽⁹⁾。

オホーツク文化の銚頭の分類

オホーツク文化の銚頭に対する前田1974年分類の内容を、前項で示した基準にしたがって整理してみたい(図5)。論文のタイトルに「回転式銚頭」

があることから明らかなように、まず抵抗機能による回転式/カエリ式(本稿の鉤引式)の分類が先行して行われている。また、対象となっている資料は、柄への装着方法では全て雌形銚頭である。ソケットの断面形でみると、A群・B群が開窩式、C群~E群が閉窩式である。

開窩式については、固定機能と繫留機能との関係によって、兼用式がA群、分離式がB群に細分される。閉窩式については、抵抗面の幅と索孔の方向・数の二つの方法で細分されている。抵抗面の幅に注目した場合、抵抗面の幅が狭いのがC群であり、広いのがD群・E群である。一方、索孔の方向・数に注目した場合、抵抗面に平行な方向に一つの孔をもつのがC群・D群、抵抗面と直交する方向に二つの孔をもつのがE群である。

さらに前田分類においては、頭部形態による細分が行われている。単純に尖るものを1類、石鏃や鉄鏃を装着するための溝を設けるものを2類、両側にカエシを設けるものを3類としている。この分類基準は、A群~E群とは独立した基準として設けられている。前述した銚頭の機能との関連でいえば刺突機能、一部は抵抗機能に関係する分類基準である。

前田は、2002年にオホーツク文化の銚頭の分類を改訂している(前田2002)。1974年の分類が回転式銚頭を対象を絞っていたのに対して、Iカエリ式、II回転式、III複合式の三群を「最も基本的な機能分類」として導入している。そして、従来の「E群と構造的にほとんど一致しながら、ソケットが閉窩式をとる」グループを新F群として分離した。さらに「上記の開窩式(新F群:引用者註)と同一構造・特徴を具えながら、2対以上のカエリを左右の体側に具え、しかも銚縄を結縛する索孔が体中央部よりに設けられ、回転機能を具えていることを示す一群」を、III群(複合式)だとしている。つまり構造的にほとんど同じ銚頭を、E群、新F群、III群として分離したことになる。この前田による新分類案は、いくつかの重要な指摘を含んではいる

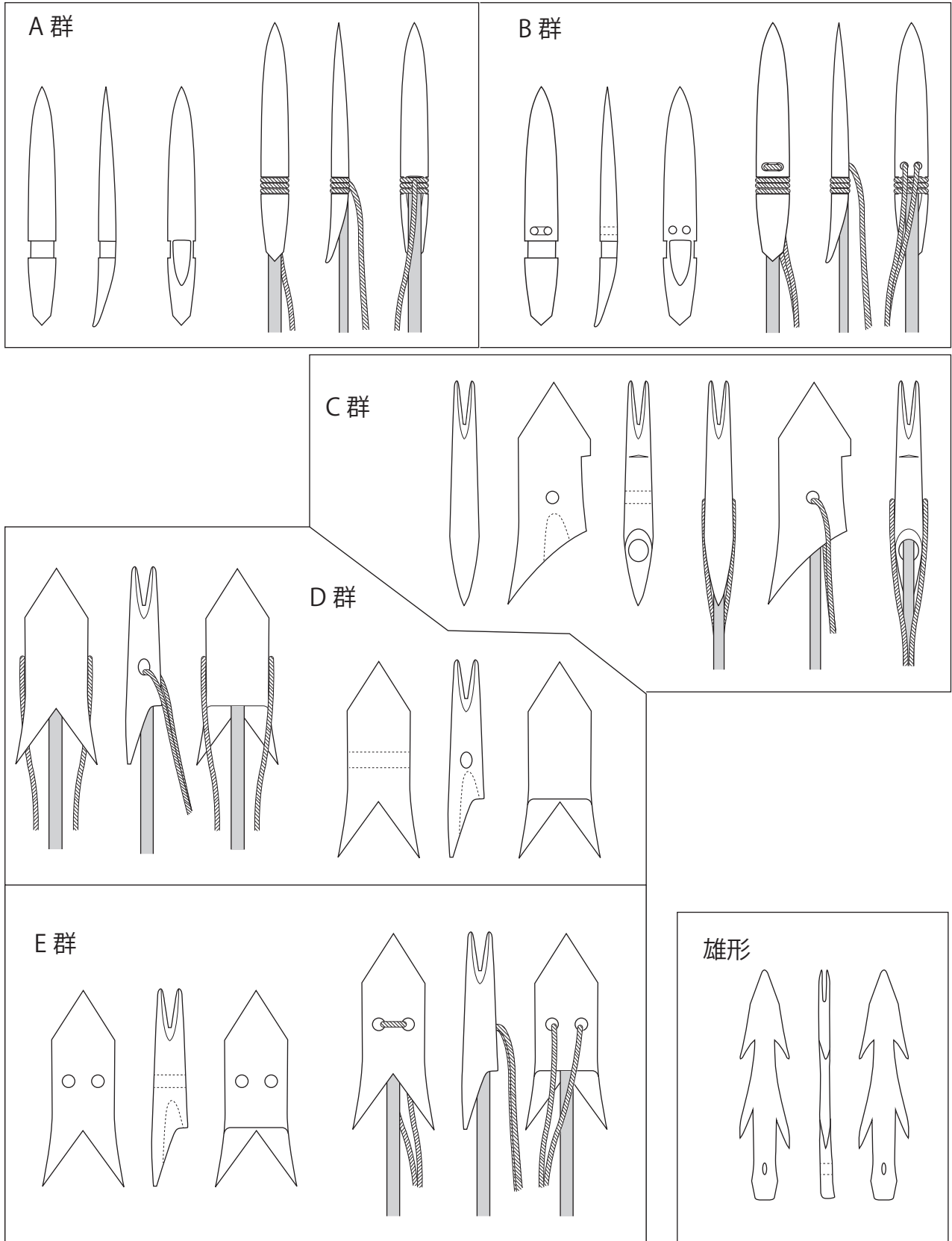


図5 オホーツク文化の銚頭の種類

ものの、全体としては山浦が批判するように「以前の論考よりも問題を複雑化させただけのものとなってしまっている」（山浦2008: p.15）と言わざるを得ない。サハリン出土の資料の中に従来のA群～E群の範囲に収まらないタイプの銚頭が存在することは事実だが、その認定基準には検討の余地があるといえよう。特に「複合式」の設定については、必ずしも研究上有効とは考えられないと筆者も指摘したことがある（高橋他2005）。

銚頭の分類図

オホーツク文化の銚頭の分類について、筆者は縦軸横軸に異なる分類基準を組み合わせて銚頭を配置したマス目状の分類図を用いて説明したことがある（高橋2002、参考図1）。こうした分類図による説明は、その前年に発表した続縄文時代の銚頭に対する研究において使用したものが原型となっている（高橋2001、参考図2）。この続縄文の分類図は、それまでしばしば混乱がみられた雄形／雌形と鉤引式／回転式の分類基準を明確に区別し、さらに両者を組み合わせることによって、当時議論されていた「恵山型」ないし「茎孔式双尾」（筆者の分類では第2種）銚頭の特徴を説明しようとしたものである。しかしながら、オホーツク文化の場合は、続縄文と同じ基準を適用しただけでは、開窩式・回転式（A・B群）と閉窩式・回転式（C～E群）、雄形・鉤引式の3つに大別されるだけで、それ以上の細別ができない。このため参考図1では、3つ目の軸（図では左側）として「繩の機能／方向」を追加して兼用式／分離式（当時は索紐兼用式と索独立式と呼称）と索孔の方向による分類基準を加え、さらに右側の軸に移した抵抗機能による分類には抵抗面の幅の広狭という回転式の細分基準を加えていた。

参考図1左下に示した資料は、サハリン・プロムイソロボエII遺跡出土資料であるが、本文ではこの資料に言及していなかった。したがってこの資料を配置した意図は厳密には不明であるが、当時の続

縄文期銚頭研究を背景に、雌形かつ鉤引式の例として図示したものである。この資料は、同年に前田による新分類で「III 複合式」の例として提示されることになる。

参考図3は、2009年にモヨロ貝塚の発掘調査報告書において示した分類図である（高橋2009）。出土資料の報告であるため、アイヌ文化の資料も含めてI類～IV類という分類を採用しているが、その結果は基本的には前田分類と一致している⁴⁰⁾。この分類図を2002年のもの（参考図1）と比較すると、まず対象を雌形・回転式の銚頭に限定しており、雄形の列と鉤引式の行に相当する部分がなくなっている。これはオホーツク文化では雌形・回転式と比較して雄形・鉤引式の分類は分かりやすいと考えて省略したものである。しかし、雄形・鉤引式は道東部オホーツク文化の銚頭を特徴づけるタイプであり、省略したのは適切ではなかったかもしれない。分類基準の縦横を入れ替えているが、これはレイアウトの都合であり深い意味はない。右辺に「全体の形状」を加えたのは、アイヌ文化期のIV類をII類と区別するためであった。結果として、この図では四辺に分類基準が配置されている。

参考図4は、オホーツク文化の銚頭についての一般向けの概説の中で使用した分類図である（高橋2013）。基本的な配置は参考図3と変わらないが、対象をオホーツク文化に限定し、縦横の軸からは独立した形で「雄形・鉤引式」の資料を付け加えている。また、分類名称は、前田1974年分類に従っている。また、参考図1・3では、閉窩式も分離式に含まれていたが、参考図4では閉窩式のC群やD群が分離式に含まれないような配置になっている。これは兼用式／分離式の区別を開窩式の下位分類として位置付けるような、見解の変更があったことを示している。ただし、やはり閉窩式のE群が分離式として配置されているため、この分類図における変更は不徹底であった。

参考図5は、2018年に、北海道における銚頭の変

遷を通時的に説明する中で使用した分類図である(高橋2018)。雄形・鉤引式の分類基準を復活させ、兼用式／分離式の区分は引き続き開窩式の下位分類としている、さらに、幅の広狭・索孔の方向については、「回転式・閉窩式」の銆頭だけに適用する下位分類としている。これらの結果として、2軸の中に2軸が入った入れ子状の分類図になっている。E群の位置づけは閉窩式の下位に変更され、兼用式／分離式の分類とは無関係である。また、地域差や時期差についてのコメントを書き加えている。

続縄文の銆頭を対象とした参考図2が2軸によるある意味で単純明快な分類図であったのに対して、オホーツク文化の銆頭の分類図は、3軸や入れ子状になっており、より複雑な形態である。これはオホーツク文化の銆頭が、複数の着眼点による、かつ複数の階層にわたる分類基準を組み合わせて分類されていることを反映している。

おわりに

本稿では、筆者がこれまでにオホーツク文化の銆頭に対して行ってきた分類について、その基準を整理した。また、筆者がこれまで示してきた分類図を概観し、その修正点の背景にある考え方の変化と問題点を指摘した。オホーツク文化の銆頭の分類を示すのに、筆者がこれまで多用してきたマス目状の分類図が有効なのか、あるいはこれに代わるより分かりやすい提示方法があるのかについては、今後の検討課題としたい。

〔註〕

- (1) トコロチャシ跡遺跡やモヨロ貝塚の発掘調査報告書の事実記載では、それぞれの遺跡での出土資料に応じた分類を採用していたが、その際の分類基準および分類結果は、基本的に前田1974年分類によるものと一致している。
- (2) 以下の本文中で、銆頭の装着方法について述べる場合の「柄」には中柄も含んでいる。日本列島の先史時代にも中柄は用いられたと考えられるが、考古資料でははっきり

しないことが多い。

- (3) 銆頭の用語や分類については、旧稿の刊行後にも小杉(2016)や福井(2017)による論考が発表されており、そこには筆者の見解に対する批判も含まれている。銆頭の分類について述べるにあたっては当然これらの見解にも触れるべきだが、いずれも続縄文文化の銆頭を扱った論考のため、本稿の扱う範囲から大きく逸脱することになる。このため、続縄文文化の銆頭についての別稿を用意することにして、本稿では基本的に従来の筆者の立場に従っておきたい。
- (4) 開窩式の定義は、研究者間で一致をみていない(高橋2008)。本稿の説明は、あくまで筆者の立場によるものである。
- (5) 前田の用語では「茎溝式」であり、アラスカ考古学における grooved harpoon に相当する。前田は、オホーツク文化期より新しい時期の銆頭である(旧)F群を「開窩式」として区別している。その分類基準は1974年論文中では明示されていないが、前田(1967)では、「開窩式と溝型(茎溝式)とは類似した外形を示すが製作過程はこのように異なる」と述べており、製作過程の違い(開窩式はまず孔を穿ってから切り開く)を基準としている。
- (6) 兼用式の構造をもつ銆頭は、北海道で縄文時代から擦文時代まで、長く使われる。
- (7) 溝と孔ではなく、固定用と繫留用の溝を1本ずつ、計2本もつような場合もあるが、オホーツク文化にはそのような例はみられない。
- (8) 鉤引式のほかに有鉤式やカエリ式などの用語も用いられることがあるが、「回転式」が広く使われているのとは対照的に、いずれもあまり普及していない。
- (9) 縄文時代の「燕形銆頭」は、回転面と平行な方向に一つの索孔をもつ。こうしたタイプが主流を占めることは、北太平洋沿岸の銆頭を広く見渡しても例外的である。
- (10) 厳密に言えば、各分類群を並列で並べている前田分類に比べて、モヨロ貝塚で筆者が提示した分類案は、閉窩式であるC群～E群を下位の基準で細分した階層的な構成になっている。

引用・参考文献

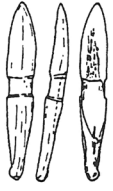
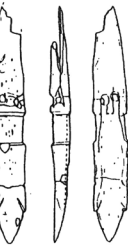
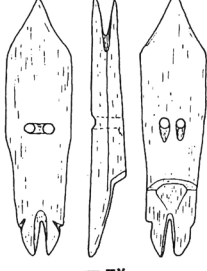
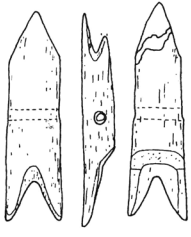
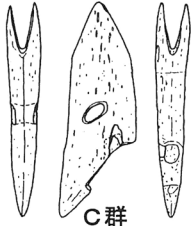
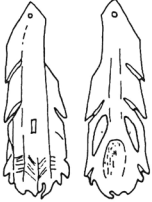
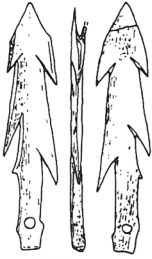
- 小杉 康 2016 「続縄文前半期における礼文華遺跡の銚頭」『北海道考古学』52:1-18
- 高橋 健 2001 「続縄文時代前半期の銚頭の研究」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』16:82-137（高橋 2008 に再録）
- 高橋 健 2002 「海に生きたオホーツク人」『北の異界—古代オホーツクと氷民文化』東京大学総合研究博物館特別展示東京大学コレクション XIII、pp.80-93
- 高橋 健 2008 『日本列島における銚頭の考古学的研究』北海道出版企画センター
- 高橋 健 2009 「骨角器」『史跡最寄貝塚』網走市教育委員会、pp. 320-336
- 高橋 健 2013 「オホーツク文化の骨角器」『Arctic Circle』89:4-8

- 高橋 健 2018 「海獣狩猟の変遷」『Biostory』30:23-27
- 高橋 健・V. デリューギン・IYa. シェフコムード・S.F. コシツェナ 2005 「ハバロフスク州郷土誌博物館所蔵の銚頭関連資料について」
- 福井淳一 2017 「続縄文文化における骨角器の動態」『北海道考古学』53:71-90
- 前田 潮 1967 「『有溝型銚頭』についての二、三の問題」『大塚考古』8:11-18
- 前田 潮 1974 「オホーツク文化とそれ以降の回転式銚頭の型式とその変遷」『史学研究』96（再録：前田潮 1987 『北方狩猟民の考古学』、pp.65-114）
- 前田 潮 2002 『オホーツクの考古学』同成社
- 山浦 清 2008 「プロト=アイヌ期以降における銚頭の変遷とその背景」『北海道考古学』44:1-20

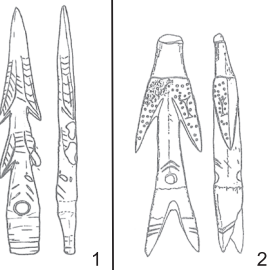


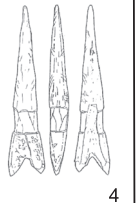
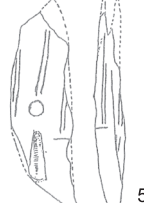
A note on the classification of harpoon heads of the Okhotsk culture.

Ken Takahashi

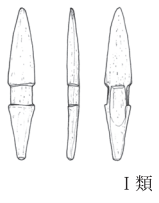
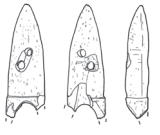
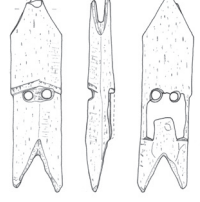
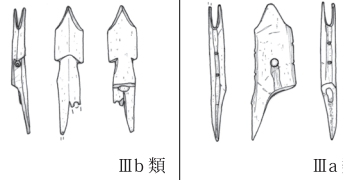
The Okhotsk culture is known as a sea-mammal hunting culture, having a variety of harpoon heads. In 1974, U. Maeda classified the toggle harpoon heads of the Okhotsk culture into five types, from Type A to Type E. In this note, the author illustrates these types from the perspective of the function of the harpoon heads: hafting, thrusting, detaching, hooking and holding.

		柄への装着方法					
		雌形		雄形			
		開窩式	閉窩式				
縄の機能／方向	索紐兼用式	 A群				抵抗面の幅広い 回転式 抵抗機能	
	抵抗面に直角	 B群	 E群				
	索独立式		 D群				
	抵抗面に平行		 C群				抵抗面の幅狭い
		 F群			 G群		鈎引式

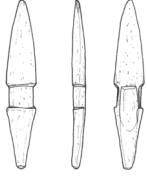
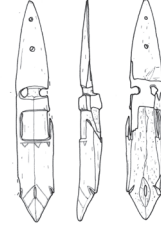
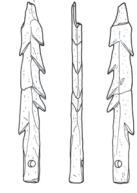
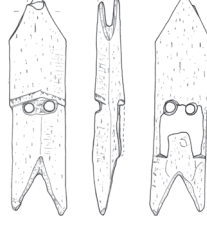
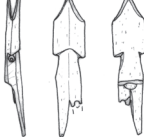
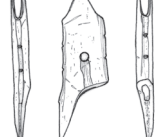
参考図1 オホーツク文化の銚頭の分類図 (高橋 2002)

		柄への装着方法			
		雄形	雌形		
			閉窩式	開窩式	
		兼用式		分離式	
抵抗機能	鉤引式	 <p>第1種 第2種</p>		<p>1~3 有珠モシリ 4 茶津2号洞穴 5 祝津貝塚</p> <p>0 5cm</p> 	
	回転式	 <p>第3種 第4種</p>	 <p>第4種 第5種</p>	 <p>第5種</p>	

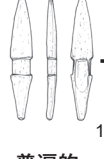


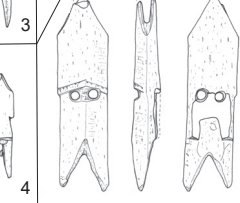


参考図2 続縄文時代の銚頭の分類 (高橋 2008: 初出 2001)

		繫留機能と固定機能				全体の形状
		兼用式	分離式		円錐形	
			索孔が抵抗面に直角	索孔が抵抗面に平行		
ソケットの形状	開窩式	 <p>I 類</p>	 <p>IV 類</p>	<p>(縮尺不同) II 類: 高橋 2003 より転載</p>	柳葉形	
	閉窩式	 <p>IIIc 類 IIIb 類</p>	 <p>IIIa 類</p>			
		広い		狭い		
		抵抗面の幅				

参考図3 モヨロ貝塚出土の銚頭の分類 (高橋 2009)

		繋留機能と固定機能			
		兼用式	分離式		
ソケットの形状	開窩式	 <p>A 群</p>	 <p>B 群</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 雄形・鉤引式  </div> <p>他は全て雌形・回転式</p>	
	閉窩式	<p>A～E 群の分類は、前田潮 1974 による（縮尺不同）</p>	 <p>E 群</p>	 <p>D 群</p>	 <p>C 群</p>
				抵抗面の幅広い	狭い
		索孔が抵抗面に直角		平行	
		索孔と抵抗面			

参考図 4 モヨロ貝塚出土の銚頭の分類（高橋 2013）

		柄への装着方法				雄形
		開窩式		閉窩式		
		兼用式	分離式	前半期に多い		
抵抗機能	回転式	<p>在地の伝統</p>  <p>1</p> <p>普遍的</p>	 <p>幅狭い</p> <p>2</p> <p>終末期に出現</p>	<p>索孔横 1</p>  <p>3</p>	<p>索孔縦 2</p>  <p>4</p> <p>5</p>	<p>1-6 モヨロ貝塚</p> 
	鉤引式					<p>道東に多い</p>  <p>6</p>

参考図 5 オホーツク文化の銚頭の分類（高橋 2018）

横浜ユーラシア文化館 第9号

Bulletin of the Yokohama Museum of EurAsian Cultures No. 9

2021年3月31日発行

編集 横浜ユーラシア文化館

〒231-0021 横浜市中区日本大通12

Tel.045-663-2424 Fax.045-663-2453

www.eurasia.city.yokohama.jp/

発行 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団

印刷製本 株式会社佐藤印刷所

Edited by the Yokohama Museum of EurAsian Cultures

12 Nihon-odori, Naka-ku, Yokohama, Japan

Published by the Yokohama Historical Foundation

Printed in Japan by Sato Printing Co., Ltd.

©Yokohama Museum of EurAsian Cultures 2021

ISSN 2187-7734